

聖書から見た共産主義

第1回 神を否定する思想のはじまり

私たちが共産主義を考えるとき、まず根本にあるのは「唯物論」と「無神論」です。

カール・マルクス自身が宗教を「民衆のアヘン」と呼び、信仰を社会から排除すべきだと主張しました。

この言葉は、宗教が民衆の苦しみをごまかし、体制への服従を促す「精神的な麻薬」として機能していると批判したものです。

信仰そのものを「幻想」と断じたこの思想は、のちの共産主義体制において、宗教の組織的な排除・弾圧へと発展していきました。

宗教は人々を眠らせ、搾取に耐えさせるための道具にすぎないと断じたのです。

そこから生まれた思想は、神を否定し、人間の理性と物質的条件を唯一の基準としました。

しかし聖書は、神を否定することこそが、最も愚かで危険な出発点であると繰り返し警告しています。

1. 神を無視する思想がもたらすもの

詩篇には次のような言葉があります。

愚かな者は心のうちに「神はない」と言う。彼らは腐れはて、憎むべき事をなし、善を行う者はない。（詩篇 14 篇 1 節）

ここで「愚かな者」とは、単に知識が乏しい人のことではありません。

知識や論理を持ちながらも、あえて神を退け、自らの力だけで世界を説明しようとする人のことです。

聖書は、神を無視する思考が道徳的腐敗に直結すると断言します。

実際、共産主義は「神はいない」「この世は物質だけで成り立っている」と宣言しました。

その結果、命の尊厳や倫理は「社会的に有用かどうか」で測られるようになり、人間が道具や部品のように扱われました。

ソ連のスターリン時代には、大粛清と強制収容所（グラーグ）によって百万人を超える人々が命を落とし、さらに数百万人が自由を奪われました。

中国の文化大革命では、数多くの教会や聖書が破壊され、信仰者が迫害を受けました。これらは無神論を土台とした体制がもたらした悲劇でした。

2. 無神論が生み出す道徳的空白

詩篇 53 篇も同じことを繰り返しています。

愚かな者は心のうちに「神はない」と言う。彼らは腐れはて、憎むべき不義をおこなった。善を行う者はない。（詩篇 53 篇 1 節）

人は神を恐れる心を失ったとき、何が正しいかを判断する基準を失います。

聖書は「主を恐れることは知恵のもとである」（箴言 9 章 10 節）と語りま

す。その基盤が失われると「力ある者が支配する」社会へと転がり落ちてしまうのです。共産主義国家の歴史はその証拠です。

ソ連では正教会の聖職者が多数処刑され、中国では、「天安門事件」の背景に無神論的権力構造がありました。

信仰や良心が公的に否定されると、人間の尊厳を守る防波堤は崩れ、権力の思うままに人々が犠牲となります。

3. 神を拒む思想の根にあるもの

無神論の背後には単なる思想以上のものがあります。それはしばしば「神の座に自分を置こうとする心」です。

イザヤ書にはこう記されています。

あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』。（イザヤ 14 章 13~14 節）

これはサタンの心を象徴する言葉です。神を否定することは、突き詰めれば「自分が神となる」ことを意味します。

共産主義もまた「人間が歴史を動かす唯一の主体だ」と宣言し、人類の救いを「神」ではなく「革命」に求めました。

そこには悪魔的な傲慢が潜んでいます。イエスもユダヤ人指導者に対してこう語りました。

あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父

であるからだ。（ヨハネ福音書 8 章 44 節）

悪魔は人殺しであり、真理を退ける存在です。この言葉は、無神論を掲げて数えきれない人々を犠牲にしてきた共産主義体制と重なって見えます。

4. 現代に潜む「神なき思想」

今日、表立って共産主義を信奉する人は少ないかもしれませんが。しかし「神はいない」「信仰は時代遅れだ」という考え方は、教育や社会の空気の中に根強く残っています。

進化論だけが科学的真理であるかのように教えられ、道徳や倫理が「社会の合意」に過ぎないとされる風潮もまた、神を否定する無神論の延長線上にあります。

聖書はそのような思潮に対して、明確に「愚かなる者」と警鐘を鳴らしています。

神を退けることは、必ず倫理と社会の崩壊につながるからです。歴史はその事実を証明しています。

5. まとめ

無神論は単なる学説ではなく、聖書から見れば「愚かさ」であり「危険な思想」です。

共産主義の根にあるこの無神論を直視するとき、私たちは信仰の価値を一層強く理解できます。

歴史に学ぶならば、神を拒む社会がどれほど多くの血を流し、文化や伝統を破壊してきたかを見逃すことはできません。

同時に、神を認める社会こそが人間の尊厳を守り、真の自由を与える基盤となるのです。

第2回 思想や理論が神にすり替わるとき

共産主義は出発点から「神を否定する思想」でした。しかし、神を退けたあとに、人間が空白を放置することはありません。

人は何かを捧まらずには生きられない存在です。神を否定した社会は、必ず別の「偶像」を立て、それを絶対視します。

共産主義が歩んだ道は、まさに「思想の偶像化」の歴史だったのです。

1. 偶像化のプロセス

ローマ人への手紙にはこう記されています。

なぜなら、彼らは神を知っていながら、神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからである。彼らは自ら知者と称しながら、愚かになり、不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの像に似せたのである。（ローマ人への手紙1章21～23節）

神をあがめる代わりに、人は自らの思想や制度を神格化してしまいます。

共産主義の国では、「唯物史観」や「階級闘争」が絶対的な真理とされ、神学の代わりに「マルクス・レーニン主義」が信条となりました。

人々は聖書を読む代わりに『資本論』を学び、指導者の言葉を聖典のように暗記しました。

聖書はその根を「むなしい思い」と呼びます。神を退けると心は空虚となり、必ず別のものを神の座に据えるのです。

2. 危険な人間中心の思想

コロサイ人への手紙でも警告されています。

あなたがたは、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの靈力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。（コロサイ人への手紙2章8節）

ここでいう「哲学」とは、人間中心の思想体系です。思想そのものが悪いのではなく、それが神の真理に取って代わるとき、人を「虜」にしてしまうのです。

共産主義思想も、解放と平等という理想を掲げながら、結局は人を縛り、思想統制と恐怖政治をもたらしました。

これは、人間の理論を神にすり替えるときに避けられない帰結です。

さらに聖書は、偶像崇拜を単なる迷信とは見ません。それは背後で悪霊への奉仕に直結していると語ります。

そうではない。人々が供える物は、悪霊ども、すなわち、神ならぬ者に供えるのである。わたしは、あなたがたが悪霊の仲間になることを望まない。
(コリント人への第一の手紙 10 章 20 節)

彼らは神でもない悪霊に犠牲をささげた。それは彼らがかつて知らなかった神々、近ごろ出た新しい神々、先祖たちの恐れることもしなかった者である。(申命記 32 章 17 節)

共産主義が「偶像」としたのは、木や石の像ではありませんでした。そこに据えられたのは「理論」であり「国家」であり「党」でした。

しかし、聖書の視点で見れば、それもまた悪霊の力に仕えることと同じです。「思想の偶像化」は悪魔崇拝と本質的に変わらないのです。

3. 歴史における「思想の偶像化」の実例

この「思想の偶像化」は、歴史上に具体的な形で現れました。

ソ連ではレーニンやスターリンの肖像画が街中に掲げられ、事実上「聖像」のように崇められました。

中国では毛沢東の『語録』が「赤い聖書」と呼ばれ、信徒がみ言を暗唱するように、人民がそれを唱和しました。

北朝鮮においては、金日成・金正日・金正恩の三代にわたる指導者が「太陽」「民族の父」として神格化され、家々には必ず指導者の肖像が掲げられています。

これらは単なる政治宣伝ではなく、明らかに宗教的儀式の代替でした。

神を退けた結果、人間の思想と権力がその座を奪い、「擬似宗教」として機能したのです。

4. 現代社会における思想崇拝

では、現代の私たちには関係がないのでしょうか。決してそうではありません。

今日もなお「経済成長こそ絶対」「科学がすべてを解明する」「テクノロジーが人類を救う」といった考え方が、人々の信仰のように語られることがあります。

もちろん経済や科学は重要ですが、それらを「神」の座に据えるなら、同じ過ちを繰り返すことになります。

聖書は「むなしい思い」と「偶像崇拝」への警告を時代を超えて語り続けているのです。

5. まとめ

共産主義は無神論を出発点とし、やがて「思想の偶像化」という道を歩みました。

聖書が指摘するように、神を退けた人間は必ず別のものを神にすり替えます。そのとき人は自由を失い、悪霊の支配下に置かれてしまうのです。

わたしたちも自分の心を省みる必要があります。知らず知らずのうちに、「理論」や「お金」、「権力」といった偶像を拝んでいないでしょうか。

聖書は私たちに「主を恐れることは知恵のはじめ」と教えています。

人間の思想や理論が神の座を奪うとき、そこには必ず崩壊が待っています。だからこそ、真の神をあがめることが、自由と平和の唯一の道なのです。

第3回 全体主義と「獣」の支配

共産主義は無神論から出発し、やがて思想を偶像化し、国家権力と結びついて「全体主義」という形をとりました。

個人の自由や信仰を否定し、党と国家が絶対となる体制です。

聖書はそのような体制を「獣」として描き、その背後に「龍（サタン）」がいることを示しています。

これは単なる古代の寓話ではなく、歴史の現実を鋭く照らし出す預言です。

1. 「獣」の姿として描かれる権力

ダニエル書には恐ろしい獣の幻が登場します。

彼はまた時と律法とを変えようと望む。（ダニエル書 7 章 25 節）

ここに描かれる獣は、神の秩序を否定し、自分の権威で律法や時代を塗り替えようとする権力の象徴です。

共産主義体制は、まさにその姿を体現しています。伝統的な価値観や宗教的習慣は「反動」として排除され、国家の都合に合わせて歴史や制度が書き換えられたのです。

2. ヨハネの黙示録の「獣」と「龍」

新約聖書のヨハネの黙示録には、さらに直接的な表現があります。

また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言った、「だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか」。（ヨハネの黙示録 13 章 4 節）

「龍」とはサタン、「獣」とは地上に現れる神に敵対する権力を意味します。サタンが背後で力を与え、人々はその権威に服従し、恐れによって支配されます。

共産主義体制下では、国家そのものが「獣」となり、人々は「党を讃える歌」を歌い、「指導者の肖像画」に頭を下げ、信仰や思想を統制されました。

それは政治というより、宗教的礼拝のかたちに近いものでした。

3. 「全世界は悪しき者の配下にある」

ヨハネの第一の手紙にはこうあります。

また、わたしたちは神から出た者であり、全世界は悪しき者の配下にある

ことを、知っている。（ヨハネの第一の手紙 5 章 19 節）

聖書は、世界全体がサタンの影響下にある現実を認めています。その支配が歴史の中で特に強く現れたのが、全体主義的な体制です。エペソ人への手紙にも次のようにあります。

わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。（エペソ人への手紙 6 章 12 節）

つまり、共産主義体制との戦いは単なる政治的対立ではなく、背後にある「悪の霊」との霊的戦いなのです。

4. 歴史が証明する「獣」の実態

歴史の事実を振り返れば、この預言の言葉が決して抽象的でないことが分かります。

ソ連では秘密警察（NKVD、KGB）が人々を監視し、信仰を持つ者は「国家の敵」として迫害されました。教会は閉鎖され、聖職者は収容所に送られました。

中国では文化大革命の時代、聖書は焼かれ、教会は破壊され、人々は「毛沢東語録」を聖典のように唱えさせられました。

北朝鮮ではキリスト教徒は徹底的に弾圧され、代わりに「金日成・金正日・金正恩」を讃える宗教的儀式が日常化しています。

これらは「獣」に支配された社会そのものです。人間が神の座を奪うとき、それは必ず悪魔的な支配に転じます。

5. 恐怖と服従の構造

ヨハネの黙示録 13 章はさらに続けます。

そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちとを汚した。（ヨハネの黙示録 13 章 6 節）

共産主義体制が「宗教は迷信だ」「神は存在しない」と嘲笑したのは、まさに神を冒瀆する行為でした。

その結果、信仰を守ろうとした人々は迫害され、殉教者も数えきれません。この構造は「恐怖」と「服従」によって成り立っています。

人々は監視や処罰を恐れ、次第に思想や言葉を自ら制御するようになります。こうして「獣を拝む」社会が完成するのです。

6. 現代における「獣」の影

では、この「獣」の支配は過去の話でしょうか。そうではありません。現代社会にも「全体主義の影」は存在します。

SNS やメディアで特定の意見以外を許さない雰囲気を作られるとき、政治や経済の力が絶対化され、人々が思考停止して服従するとき、宗教的信仰が公的に軽んじられ、社会の基盤から切り離されるとき—

これらは突然生じるものではありません。神を土台としない社会が積み重ねてきた小さな判断の積み重ねが、やがて「獣の支配」という形に結実していくのです。私たちの日常の選択もまた、その流れと無縁ではありません。

それらは小さな「獣の支配」の現れです。聖書は、歴史だけでなく、私たちの日常の中でも、サタンの権力の働きを見抜く知恵を与えてくれます。

7. まとめ

全体主義と「獣の支配」は、聖書の預言にとどまらず、共産主義体制の歴史において現実となりました。

神を否定し、人間の思想と権力を絶対化した結果、それはサタンの獣の姿をとり、数えきれない命と自由を奪ったのです。私たちはこの歴史を忘れてはなりません。

同時に、今なお働いている「悪の霊」との戦いを自覚しなければなりません。信仰を守るとは、単に個人の心の問題ではなく、サタンの権力に対する霊的抵抗なのです。

第4回 神を拒む社会の終末

共産主義は、無神論を出発点として思想を偶像化し、国家権力を「獣」として働かせ、さらに擬似宗教と悪魔崇拝へと変質しました。

しかし、聖書は、このような神を拒む社会が最終的にどのような結末を迎えるのかを明確に語っています。

そこには厳しい審判の預言と同時に、希望の回復の約束があります。

1. 神を拒んだ者の行く末

箴言にはこう記されています。

彼らは知識を憎み、主を恐れることを選ばず、わたしの勧めに従わず、すべての戒めを軽んじたゆえ、自分の行いの実を食らい、自分の計りごとに飽きる。（箴言 1章 29～31節）

神を退けた者は、自らの行いの結果を刈り取ります。共産主義国家が理想を掲げながらも、結局は大量の死者と破壊をもたらした歴史は、この聖句の通りでした。

人間が神を無視して作り出すシステムは、必ず自己崩壊の道をたどるのです。パウロもこのように語っています。

そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかったので、神は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せられた。（ローマ人への手紙 1章 28節）

神を認めない社会は、自ら無価値な思いに支配され、真理から遠ざかります。

共産主義の歴史的崩壊（ソ連の解体など）は、人間の思いに基づく体制の脆さを示す一例です。

2. 悪魔的支配の終末

聖書は、悪魔的支配が永遠に続くのではないと告げます。ヨハネの黙示録は、最終的な裁きを次のように描いています。

彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。（ヨハネの黙示録 20章 10節）

ここで悪魔、獣、偽預言者という三つの勢力がすべて裁かれます。

これは神に敵対する思想（偽預言者）、権力（獣）、そしてその背後にあるサタンが、最終的に滅びることを意味しています。

共産主義という体制もまた、「獣」としての役割を果たしましたが、それは永遠に存続するものではなく、神の審判のもとに崩れ去る運命にあります。

3. 歴史に見る「神なき社会」の崩壊

ソ連は「永遠の国家」を標榜しましたが、70年余りで崩壊しました。

中国もまた文化大革命で数百万とも言われる犠牲を出し、後に大きな修正を余儀なくされました。

歴史は、神を拒んだ社会が決して安定や繁栄を長続きさせられないことを証明しています。

繁栄しているように見えても、その基盤は砂の上に建てられた家のように脆弱なのです。イエスも言われました。

雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。（マタイ福音書7章27節）

神を土台としない社会は、やがて必ず倒れるのです。

4. 裁きと同時に与えられる希望

しかし聖書は、ただ破滅を語るだけではありません。裁きと同時に「希望の回復」を告げます。

ヨハネの黙示録は、続いて次のように語っています。

わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとして下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである」。（ヨハネの黙示録21章1～4節）

共産主義の歴史は「神なき社会」の行き着く先を示しました。しかし聖書が語る結末は、ただの崩壊ではありません。

これは、神を拒んだ社会の崩壊の後に、神を受け入れる者に与えられる約束です。つまり「神なき社会の終わり」は「神と共にある社会の始まり」への前触れです。

5. 現代に生きる私たちへの問い

今では共産主義というイデオロギーは衰退しましたが、無神論や人間中心主義

の思想は、いまだに根強く存在しています。

「経済成長がすべて」「科学が万能」「人間の理性が世界を救う」といった考えは、共産主義が辿った偶像化の延長線上にあります。

私たちは歴史を反面教師としなければなりません。神を退けると、社会も個人も必ず崩壊に向かいます。しかし、神を認めるとき、そこには回復と希望が約束されています。

聖書は、神を拒む社会が必ず滅びに至ると警告します。それは単なる歴史の教訓ではなく、霊的な原則です。共産主義の歴史はその現実を示す証拠です。

どの道を選ぶかは私たち自身にかかっています。共産主義のような「神なき思想」に従うのか、それとも唯一の神を求め、信仰に立ち返るのか。選択は一人ひとりに委ねられています。